

ポツクリ（コロリ）信仰の諸相（二）

——東北地方を事例として——

松崎 憲三

はじめに

- 一、山形市のコロリ信仰
  - 二、会津のコロリ三観音
- 結びにかえて

## はじめに

従来民俗学徒の誰しもが注目しなかったボックリ（コロリ）信仰に、逸早く着目して黙々と調査を重ね、数多くの足跡を残してきた木村博は、山形市長谷堂の「コロリ観音」について言及した下りで次のように述べている。<sup>(1)</sup>

私はつい最近まで、この信仰のことを無視してきたのである。それは余りにも特殊すぎ、正直のところ口にするのも恥かしいような気持ちであつた。そして少くとも民俗として到底採上げる気さえ起さなかつたのである。むしろそつと隠しておきたいほどの気持ちであつた。東北の風土がもつ「暗さ」が生んだ悲劇的現象としか、考えていなかったのである。

東北地方（山形）出身の木村の複雑な心境が吐露されているが、山形を中心とする東北地方のみならず、本人が現在住む伊豆地方や近畿その他各地に似た信仰があることを知るにつれて、調べてみたいと思うに至つたといふ。<sup>(2)</sup>

現在筆者が把握しているボックリ（コロリ）信仰対象の寺院・小堂・小祠四〇余のうち、東北地方は一ヶ所と、関東地方や近畿地方と肩を並べるほどである。確かに相対的に数は多い

ものの、東北地方特有の習俗とは言えないのである。筆者は先に東海地方の事例を報告しているが、小稿では山形市内のコロリ信仰、会津コロリ三観音を中心として、東北地方の事例の分析を試みることにしたい。

福島県会津地方の会津坂下町・恵隆寺（真言宗、通称立木観音）、西会津町・如法寺（真言宗、通称鳥追観音）、新鶴町・弘安寺（曹洞宗、通称中田観音）は会津コロリ三観音としてよく知られている。そのためしばしばマスコミにも取り上げられ、立川昭二や木村も言及している。<sup>(4)</sup><sup>(5)</sup>

福島県下ではこの三例以外は確認されておらず、割と山形県に集中している。米沢市大笹野・幸徳院（真言宗）のイビダレ地蔵については、既に報告済みである。<sup>(6)</sup>この他米沢市関根・普門院（曹洞宗）のコロリ薬師については、木村、武田忠の両氏が報告している。<sup>(7)</sup>本堂そばに湧く水を薬師様にお供えしていただくと、寿命のある人の病気はたちまち平癒し、また寿命の尽きた人は苦しまずあの世に行けるといふ。普門院のコロリ薬師のみならず、霊水の効験を説く所は全国的にすこぶる目立つ。なお武田は、この薬師が元々安置されていたのは普門院ではなく、山一つ越えた西方の錦戸薬師だとして、

『米沢里人談』の作者国分氏（江戸時代の文人国分威胤＝筆者注）はもともと普門院の別当であつたらしく、錦戸薬師堂をも管理していたらしい。そんなことから、春・秋の普門院の

祭礼には地元の若者組を頼んで、普門院で御開帳を行なうことになったらしい。そして現在では逆になってしまつて、春・秋の錦戸薬師堂の祭礼には、普門院から一晩だけ借りてきて行なうようになってゐる。

と述べ、両者の關係に分析を加えてゐる。<sup>(8)</sup>その歴史的経緯はともかくとして、この錦戸薬師如来も「コロリ薬師」として信仰を集めており、米沢市内には都合三ヶ所がコロリ信仰の対象地になっていることが知られてゐる。

一方山形市内では、山形市長谷堂（管理者・渡辺七郎氏、通称コロリ観音）、山形市平清水・平泉寺（天台宗、通称コロリ観音）、山形市下東山・風立寺（天台宗、通称三宝岡の生き如来）、以上三ヶ所が知られてゐるものの、木村が長谷堂のそれについて報告してゐるにすぎない。<sup>(9)</sup>そこで先ず山形市内の三例を取り上げることにした。

## 一、山形市内のコロリ信仰

### (1) コロリ観音（山形市長谷堂）

長谷堂は山形市の南西部、出羽丘陵東端の山麓に位置する農業地域である。『角川日本地名大

辞典6・山形』によれば、世帯四一七、人口一、九四五。中央部に位置する城山には、最上氏時代の支城長谷堂城址がある。寺院は、嘉吉年間の創建で永正一二年曹洞宗に改宗した大森山清源寺があり、慶長年間頃は長谷堂城主の檀那寺で、江戸期には寺領三石八斗を有した。他に本沢山西養寺（浄土真宗大谷派）、長谷山長光院（当山派修験）がある。城山に最上三十三観音の第一一番札所長谷観音があり、神明神社、八幡神社、滝山神社などが祀られている。<sup>(10)</sup>

長谷堂のコロリ観音は、城山の南麓、本沢川のほとりにあって、現在観音堂の傍にある渡辺家が管理している。現当主七郎氏は昭和九年生で、このあたりの人々は同氏を別当と呼んでいる。同氏によれば、明治の初期に城山周辺の土地を払い下げてもらった際に、その内にあつたこのお堂を管理するよう依頼され、以来渡辺家が管理を引き継いでいる。同家の檀那寺は大森山清源寺である。ちなみに観音堂そばの案内板に記された「ころり観音縁起」は以下の通りである。

御本尊は、かつての長谷堂城主坂紀伊守の家老牧野番内の念持仏であつたと伝える。観音座像高三十五センチで、平安末期の造像と推定される御木像であります。いまは如意輪観音とよばれていますが、古記録によれば准胝観音<sup>じゆんてい</sup>として崇拝されていたようであります。現在のお堂は、江戸時代明和年間に再建されました。准胝観音は「六道のうち人道を化し、よく

その法を修すれば善惡とわず、除災・除病・延命・求兒に驗あり」といわれ、古くからこの観音様の御利益が宣伝されておりましたが、特に延命の靈驗あらたかなところから、いつしかこころり観音とよばれるようになりました。来世往生すなわち永遠の生命をいただくことでもあります。しかも除災・除病の現世靈驗が加わって、難儀や病氣など一切の不幸にあうことなく極樂の浄土へ往生できる、こころり信仰となつたのであります。「この世がしあわせで、死にぎわも安樂にこころりとゆきたい」という切ない安樂死の願望をかなへてくださるこの観音様に、世人は限りない尊崇と深い帰依を捧げてまいりました。幾多の救いをねがってすがる人びとにこたえるように、こころり観音の鰐口は、連錦として幾百年、清流本沢川の瀬音に和して、その鳴り音を城山のそらにひびかせているのであります。

#### 御詠歌

ありがたや まいるところに 長谷堂の

みちびきたまえ みだの浄土へ

このように長谷堂自身はかなり古くから存在したようであるが、コロリ信仰の発生時機は残念ながら不明である。ちなみに、昭和二十一年刊の結城哀草果の随筆『田園四季』に、このコロリ観音が紹介されているが、昭和一六年に『日本の風俗』に発表したものを、後に一本にまと

められたものである。<sup>(11)</sup> 昭和九年生の渡辺七郎氏によれば、以前は置賜地方などからも人が来ていたが、今は村山地方のしかも近在の人に限られているという。しかし、小さい頃、お札詣りに来た人が、本当に丁寧にお参りしているのを見て驚いたことを、今でもはっきりと記憶しているそうであり、哀草果の記述と合わせて見ると、戦前期に広く信仰されていたものと推測される。

なお、毎月二一日が観音さんの縁日で、近所のおばあさんを中心に一四、五名が集まって賑やかしているそうである。念仏講のメンバーで、七郎氏のご両親が健在だった一〇年程前までは渡辺家が宿となり、観音堂の前で念仏を唱えた後、宿で赤飯を食べるなどしていた。特に四月二一日が盛大だったそうであるが、今は宿を別の家が引き継いでいるとのことである。

(2) コロリ観音 (山形市平清水番外・平泉寺)

平清水は市街地の東部にあって、西流する犬川に沿う農山村地域であり、古来窯業が盛んな地で平清水焼の名で知られている。『角川地名大辞典6・山形』によれば、世帯三四二、人口二、二六八、社寺に岩五郎稻荷神社・春日神社・八幡神社・大日堂・清水山耕竜寺(曹洞宗)・千歳山平泉寺(天台宗)・千歳山万松寺(曹洞宗)などがあるという。<sup>(12)</sup>

平泉寺の本尊は胎藏大日如来であり、縁起によれば元はより奥の字新山に行基作の大日如来

が安置されており、後に慈覚大師がこの地に移したものである。本堂は天和四年（一六八四）に再建されたものであり、現在の住職千歳良晃師は三七代目に当たる。檀家数は一八〇戸余り、地蔵講はあるものの観音講なるものは存在しない。平泉寺は山形の十三仏霊場の一つに数えられ、また東北八十八ヶ所巡礼のお札所にもなっているが、巡礼者は少ないという。コロリ信仰の対象となっているのは本堂内部に安置されている如意輪観音であり、参詣者にはコロリ観音と呼ばれている。

参詣者は年間一、〇〇〇人程度、春秋の彼岸時や四月一八日、九月二八日、一〇月二八日等に訪れるが、春のしだれ桜や秋の銀杏の紅葉見学、近隣の窯元の見学等、行楽を兼ねて訪れる人も多く、八割近くは女性である。地域的に見ると、山形市・天童市を中心とする山形県内の人々が大半を占めているものの、仙台方面からもやって来る。「コロリ祈願」を直接的な目的とした祈禱はないが、一、〇〇〇人のうち三〇〇〜四〇〇人位は祈禱を希望するそうである。また、最初からコロリ観音と知ってやって来るのは一〇〇名程度で、昭和五〇年頃から増えていった。希望があれば如意輪観音の写真入りのお守りを分けている。値段は参詣者の志によるもので、このお守りを希望する参詣者は年間一〇名程度にすぎないが、それを枕の下や布団の下に敷くそうである。住職婦人によれば、先日三〇代と見受けられる婦人二人が仙台から連れ立って参詣に来ていた。「コロリ往けるかどうか、などということをお心配するにはまだ早いのではないか」



と聞いたところ、姑が床についており、それを看病していたという。家族が寝たきり老人の看病をできるのは、やはり二、三ヶ月程度だと思うので、自分達が床についた時には二、三ヶ月程度で死にたいという願望があるとのことであつた。このように、床に寝ついて嫁や息子に迷惑をかけたくないという参詣者が増えていく。病院で延命処置をされるのが嫌だからという参詣者も一方にいますが、ボックリ（コロリ）往生を願う人には、現に看病しているか、そうした経験のある人が多い。ちなみに中には家族連れの参詣者も見られるが、その大半は平泉寺の檀家の人達で、家族が墓参りをしている間に高齢者が「コロリ観音」にお参りするのだそうである。<sup>(13)</sup>

平泉寺では、参詣者に本堂を開放し、茶菓子でもてなしている。参詣達者は住職や参詣者とお話を交わし、やがて友人同士となり次回の参詣を約束したり、再会を欲び合ったりしている。東京都八王子市・龍泉寺も同様の処置を取っており、参詣者同士の会話がはずんでいる。ともに大々的な宣伝はしていないものの、口コミによって参詣する人が跡を絶たない模様である。

(3) 三宝岡の生き如来（山形市下東山・風立寺）

下東山は市の北東部にあって、村山高瀬川の溪谷に沿う農山村地域で、集落は河岸段丘上に散在する。『角川地名大辞典6・山形』によれば、世帯三一六、人口一、二九八であり、三宝岡

の名で知られる寒居山風立寺（天台宗）、休名山万徳寺（曹洞宗）がある。神社は八幡神社・水神社がある。地内の字休み石には慈覚大師にちなむ伝承が伝えられる。<sup>(14)</sup>

風立寺は、斎衡三年（八五六）慈覚大師開創と伝え、寺名の由来も風輪の立ちおこる靈験あらたかな寺であると大師自らが命名したとされている。本尊は阿弥陀如来、脇土に観音と勢至の二菩薩が安置されている。この本尊はまるで生きているかのように、たちどころに参詣者の願いをかなえてくれるとされ、「三宝岡の生き如来」とも呼ばれていた。前住職の記憶によれば、昭和初期には既に安樂往生の如来として知られ、広く参詣者を集めていたという。今日ではこの如来の安樂往生のご利益が一層宣伝され、団体の参詣者が次々とバスで訪れるほどである。例祭は毎月一五日であり、特に八月一五日が大祭となっている。参詣者は戦時中を除き、昭和初期頃から数多く見られ、境内には露天がたちならぶほどだったという。参詣者は昭和四〇年頃までは、それでも寺を中心に半径二〇キロメートル以内に限られていた。即ち、山形市の他、天童市・河北町・上山市・寒河江市などの地域からやって来ていたのである。この頃は、八月一五日の縁日に向けて一四日から泊まり込みで訪れ、一五日に阿弥陀さんを拝んで帰るという風も見られた。一四日の夜は男性が女装して踊るなどの余興も繰り広げられていたようであるが、テレビが普及し、娯楽も多様化するに従がい様相が変化した。

元々風立寺は、最上光義が崇敬した祈禱寺であり、財政的にも豊かであった。そのため近隣



写真1 三宝岡の生き如来（山形市・風立寺）

の家々にもお金を貸したりしていたため、「風立寺銀行」などとも称されていた。しかし戦後の農地改革によつて寺の所有地の大半を失い、前住職は山形市役所に勤めながら、また現住職（昭和二〇年生、昭和四八年から住職）は会社勤めをしながら兼務し、二代にわたつて墓を造成しながら檀家を持つようになった。その一方で現住職は、安楽往生の御利益を人々に知らしめることで寺の経営を立て直そうと考え、会社の退職金を利用してパンフレットを作り、市と観光課に協力を仰ぎながら宣伝に努めた。また付近の温泉旅館や観光会社とも提携し、それによつて多くの参詣者を集めるようになった。

田県（山形寄りの地域）・県内の他、福島県の太平洋岸地域、新潟県・栃木県・埼玉県・東京都・千葉県・神奈川県に及んでいる。個人参詣の場合は近県から訪れるようであるが、バスツアーによる遠方からの団体参詣者が圧倒的に多い。ちなみにバスツアーでは、およそ三〇年前

に庄内交通の旅行会社、庄内トラベルが企画したのが最初のものである。今では四月一日から一月三十一日までのシーズン中、毎日二台の割でやって来るとのこと。なお、年間の参詣者数四、五万人のうち、安楽往生の祈禱を希望する人は、三、〇〇〇人ぐらいで、安楽往生のために参詣に来て、實際祈禱を受ける人は少なく、現住職の觀察では（雰囲気から判断して）、このうち深刻な願いを持った参詣者は五〇人余りといい、「後生安楽」を願って祈禱するそうである。こうした深刻な祈禱の場合、コロリ往生を果たすと遺族がお礼詣りに来ることも多く、寺院側では滅罪のため死者の戒名を聞いた上で供養するそうである。

たまたま筆者が風立寺を訪れた二〇〇二年一月二三日の午前中、庄内トラベルのバス一台がやって来た。総勢三一名のうち女性（老女）一名が下着を持参し、本堂で祈禱を受けた。一〇年程前までは、庄内地方から年間一、二〇〇人程訪れており、そのうち八〇〇人は祈禱を受けていたというから随分減ったことになる。しかし中には二七年通い続けている、という女性もいた。壮年の男性は「年寄りがずっと来ているから自分もついてきた」と言い、通り一遍のお参りをする和本堂から出て境内で雑談にふけていた。その日は松島泊りとのことであり、こちらはどうかやゝ観光が目的のようである。しかし男性の場合、家族の誰かが寝たきり老人の看護で苦勞しているのを見て、いたたまれずにやって来たという人も少なくない。なお、参詣者数は一頃よりやや少ないようであるが、「元々観光と信仰を兼ねてということだったろうが、

近年信仰離れが進んでいる」というのが現住職の認識である。一方前住職の

昔は生活に余裕がなかったので、病人が長く患うと言う事は家族の迷惑をかけることに他ならなかった。そこで病人はもう先が長くはないと思えば、食事を取らず、体の衰弱を助長して自ら死期を早めるということもしていたのではないかと思う。現在は経済的に豊かになったので、病人を長く床に生かしておくことも可能になったが、これはまともに長生させているという状態ではない。代参人が病人のために、早く死ぬように祈禱して欲しいという気持ちも理解できる。

と述べたという。<sup>(15)</sup> 前住職の発言には考えさせられる点が多々ある。現代医療への批判や代参者への同情の気持ちは肯ける。一方看とられている側が自らの命を縮めるという行為については確かめる術を持たないが、ありえなくはない。苦勞して介護してくれる者に対するせめてもの気持だろうし、あるいは人間としての尊厳を保ちたいという意志の現われなのかもしれない。いずれにしても、身につまされる思いがする。

なお風立寺で今日売り出している安楽往生グッズには、枕カバー（五〇〇円）、手拭い（三〇〇円）、木札（一、〇〇〇円）、紙札（五〇〇円）、女性用下着（八〇〇円）等がある。このうち

枕カバーが売れ筋で年間三、〇〇〇枚程度、次いで下着が五〇〇枚ほどはけるといふ。下着を置くようになったのは一〇年ほど前のことで、業者に薦められて、というのがその理由のようである。一方では寺院の再建と順調な経営、他方では参詣者の宗教的欲求に応える、この二つの狭間で揺れ動きながら日々宗教的活動にいそしんでいる、というのが風立寺の現実であろう。

以上山形市内のコロリ信仰関連寺院・堂宇三ヶ所の報告を行なった。そのうち長谷堂のコロリ観音はいわばムラ持ちのお堂であり、稀に近在の人が訪れるものの、今日では村内の人が信仰している、といった程度のもとなつてゐる。また平清水・平泉寺は積極的には宣伝してゐらず、もっぱら口コミに依存している。それでも春秋の行楽シーズンを中心に年間一、〇〇〇人程度の参詣者がある。コロリ観音であるとも知らずにそのまま帰つてしまう人もいるが、このうち三〇〇〜四〇〇人が祈禱を受けて守り札をもらひ受け、枕や布団の下に敷いて寝ているようである。一方風立寺は、大々的に宣伝に努めただけに多くの参詣者で賑わつてゐる。また数多くの安楽往生グッズを売り出していることも特徴的だが、その分深刻な参詣者と向き合うケースも多い。いずれにしても、三者三様に存続していることが読み取れる。

二、会津コロリ三観音

立木観音、鳥追観音、中田観音は、会津三十三観音霊場の札所であり、古くから信仰を仰いでいた。元々安産や縁結びのご利益があるホトケとして知られており、コロリ信仰にかかわる参詣者はさほど目立つものではなかった。しかし、一九七〇年代後半に国道四九号線が舗装されると、元々会津三観音霊場巡りが盛んであった新潟市の、ある観光業者が「会津コロリ三観音ツアー」と称してツアーを組み、商品として売り出した。現在でも、西会津町野沢の大山祇神社を加えた「会津コロリ三観音と山の神めぐり」という日帰りツアーが行なわれており、多い時にはキャンセル待ちが出るほど人気だという。ちなみに、平成八年には他の観光業者も参入し、観光業者の草刈り場となりつつある。

一方寺院側も積極的に宣伝につとめ、昭和四七年に東北新幹線が開通した際にポスターを作ったのに続き、昭和六〇年頃には会津若松市観光課と三観音の住職が協力して「仏都あいず」なるポスターを作成した。そうして昭和六一年、六三年には朝日新聞に取り上げられ、平成八年にはNHKでも放映された。寺院と行政、観光業者とがタイアップして宣伝につとめ、マスコミがそれをバックアップするという形でその存在があまねく知られるようになった。一方で口コミによる力も与り知れないものがあるようである。いずれにしても今日、三観音それぞ

れに年間一二万から一五万人位の参詣者が訪れるという。三観音のどの寺院にも『会津ころり三観音』の冊子が置かれ、縁起や巡回コース、祈願の方法等が記されている。それを見ると、「抱きつき柱」なるものに抱きついて祈願をする、という点で三者は共通している。

(1) 立木観音（会津坂下町塔寺・惠隆寺）

塔寺は会津地方の中部、只見川と旧宮川の間、扇状地に位置する。方形に近い地域に心清水八幡宮及び惠隆寺観音堂があり、その門前町として形成された街村。『角川地名大辞典7・福島』によれば、世帯一二八、人口七一。ちなみに惠隆寺の木造先手観音立像は高さ約八・五メートルあり、木彫としては全国有数の大きさで、頭・胴の一本彫製で両肩のところからはぎ合わされている。製作年代は鎌倉初期とされ、この木像を安置する惠隆寺観音堂とともに国の重要文化財に指定されている。<sup>(17)</sup>

惠隆寺の縁起によれば、同寺は欽明天皇元年（五三二）に、唐梁国の僧、青岩和尚が一仏像を護持して会津の地を布教したことに始まるという。その後舒明天皇六年（六三四）に惠隆自らの名を取って寺号を惠隆寺とし、現在の惠隆寺の基礎をつくった。大同三年（八〇八）に、諸国行脚のため会津に足をとどめていた空海は、霊夢に基づいて千手観音を彫り、田村麻呂の協力を得て大伽藍の完成をみたという。



ちなみに、惠隆寺・立木観音のご利益は（１）子年生の守護、（２）子授けから後生安楽まで（すなわち、開運厄除、病氣平癒、家内安全、商売繁盛、交通安全等にも効験あり）、（３）櫛を奉納すれば水死・苦死から免れられる、（４）黒髪の奉納による女性の心願成就、（５）抱きつき柱に抱きついて心願すれば万願成就、等々である。また、現在惠隆寺が実施している年中行事は以下の通りである。

正月一七日……………初縁日

二月……………節分会追儺式

八月九～一〇日……………四万八千日

八月一七～一八日……………例大祭

十一月一日～一〇日……………菊供養

毎月一七日は観音の命日（縁日）であるが、とりわけ六月一七日は開帳をし、盛大に祈禱が行なわれるので参詣者が多い。また十一月の菊供養は、持参した食用菊を祈禱してもらい、それを護符として食すると、中風除け・身体健固・家内和合のご利益があるとされ、この日も「安楽往生」を願って多くの人々が参詣に訪れるそうである。

なお寺院側の話だと、昭和の初期頃は新潟から三観音の巡礼にやってくる人が多かったという。列車に乗って会津若松までやって来て、そこで下車して中田観音を参詣した後に、立木観音にやってくるとちょうど昼時になる。そこで、立木観音で弁当を開いてから、野沢の鳥追観音までいくという巡拝コースをとることが多かった。同じようなルートを辿る参詣者は、県内の郡山や白河からも来ていたという。この頃は、近隣の大きなムラには観音講が存在し、女性は嫁入りするとすぐに観音講に入った。そうして恵隆寺を含む会津三十三観音巡りをすれば一人前とされ、その家の財産の管理を姑から任されるという風習があった。そのため女性の参詣者が多かったそうである。いずれにしても当時の交通の不便さから参詣者数は今と比べるべくもなく、まして、宿泊費のかさむ遠方からはさらに少なかったという。それが昭和四〇年代後半以降急増し、今では年間一四、五万人に及んでいる。

参詣者は三〇〇円の参拝料を払って観音堂内に入る。すると寺の関係者が、観音の前にかかっている帳を開きながらこの観音の説明を一通りする（今ではスピーカーが代役をつとめているが）。参詣者は本尊に向かって右側にある「抱きつき柱」に抱きつきながら、「後生安楽」を祈願する。この「抱きつき柱」に抱きつくと、ちょうど観音の顔が下から拝めるような位置にあり、右頬をつけて像を拝めば万願がかなうという。ちなみにこの柱は、老朽化に伴なう大正四、五年の修復に際して、役所の技官は「新しい柱を」と主張したが、信徒総代と住職が「是



写真 2 立木観音堂（会津坂下町・恵隆寺）

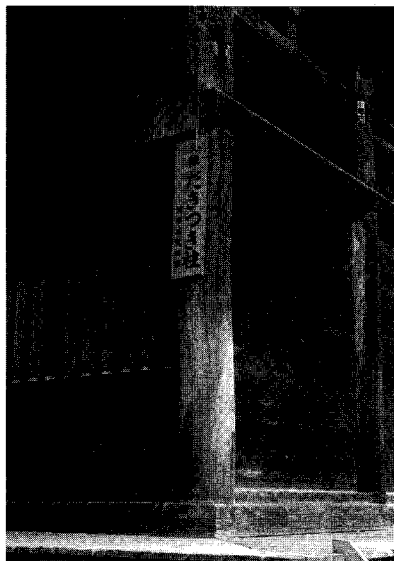


写真 3 立木観音堂外側右の  
「抱きつき柱」  
（会津坂下町・恵隆寺）

非とも古いものを使って欲しい」と懇願し、それがようやく受け入れられた。これほどの用材は近辺にはないし、結局古い用材の上下を継いで一本の柱としたのである。なお、いつ頃かは不明であるが古くは観音さんの足許あたりを撫でて祈願していたようであり、立川によればその証拠に観音さんの足許がすっかり黒くなっているという。<sup>(18)</sup>

今日の参詣者のうち、本堂に上がるのは年間で約一万人程度であり、新潟県や栃木方面から来る人が多い。なお、観音堂外壁の左右二本の柱も、今では「抱きつき柱」と呼ばれているが、これは参詣者が多くなった二〇年程前にそう銘打ったもので、参詣者の要望に応えた処置という。こちらは無料であり、家族に付添われた高齢者で、靴を脱いで堂内に入るのが辛そうな人が、外の柱に抱きついてゐる光景も見られた。このように老人本人がやって来るばかりでなく、周囲の人が本人に代わって参詣に来ることもあり、「寝ついている母親が苦しんで早く死にたいと願っているので参詣に来た」というケースもあれば、子供がこっそり内緒でやってくる場合もある。まだそれほど年ではないにもかかわらず、しかも健康であるにもかかわらず、将来家族に世話をかけたくないの参詣に来たという人もゐる。さらには数は少ないものの、不治の病に犯されている若者や乳児の家族が来ることもある。

立木観音（惠隆寺）では祈祷を受けつけているため、下着を持参して祈祷を希望する参詣者もゐるが、寺側は「尻に敷くものに観音様の判を押すことはできない」と断わっているものの、

もはや断りきれない状況だという。また業者の中には、下着を販売してはどうかと持ちかけてくるものもいるそうであるが、受け入れないというのが三観音の一致した見解である。ただし鳥追観音では、参詣者が持参した未使用のものについては応じている。中田観音でも巳年の時に限り、持参した肌着の祈禱を実施している。なお、立木観音で販売しているコロリ祈願にかかわるクツズは、健康お守り、枕カバー、手拭いだけである。ちなみに、無事に安楽往生できたからという理由で、参詣者や家族がお礼参りに訪れることも頻繁にある。寺側では、供養のための線香と般若心経の書かれた絵ローソクをそういう人達に贈っている。直接訪れるのではなく、礼状が来ることも少なくないとのことである。

(2) 鳥追観音（西会津町野沢・妙法寺）

野沢は会津地方北西部、阿賀野川南岸・安座川・四岐川流域に位置する。西は新潟県上川村に接し、北東部に野沢盆地が開け、南部から西部にかけては山地が連なる。『角川地名大辞典 7・福島』によれば、世帯九九二、人口三、八五九、西平には真言宗妙法寺・観音堂があり木像正観音立像・不動明王立像等々は県の重要文化財に指定されている。また大久保に大山祇神社拜殿があつて、年中参拝者で賑わつて<sup>(19)</sup>いるという。

妙法寺の縁起については次のように伝えられている。天平八年（七三六）の春、行基菩薩会津

巡錫の砌、子にも恵まれず、鳥獸害による不作の貧苦と悲嘆にくれる農夫に鳥追正観音を授けた。後、大同二年（八〇七）に弘法大師と徳一大師が金剛山妙法寺を創建したが、その折鳥追正観音を本尊として、脇士に不動明王と毘沙門天を安置した。本堂は建長一六年（一一六一）の地震によって倒壊したが、建長一八年（一一六三）に再建された。東西向拝口と合わせて三方開きとなっており、全国でも稀な構造となっている。この構造は、西方極楽浄土を意識したものであることから、参詣者は東の入口から入り、西から出る。安樂往生を祈願する場合には、特に南ではなく西の出口から出るようにとの案内が堂内にある。

妙法寺・鳥追観音のご利益は、（１）悪事災難除け、（２）福德、（３）延命その他、（４）縁結び、（５）子授け、安産、子育て、（６）開運・出世であり、また「御本尊に祈念を凝らして金剛壽命尊（身代りなで仏）を撫で、肌守りを念持すれば病魔を除いて心身が軽くなり、死病の時には願う月日に観音様のお迎えがある」という<sup>（20）</sup>。なお同寺の年中行事は次の通りである。

正月元旦祭 …………… 新・旧暦

正月一七日 …………… 初観音・御開帳祈祷

六月一日～三〇日 …………… 恒例大祭

六月一七日 ..... 恒例御開帳祈禱

八月九〜十日 ..... 四万八千日

一〇月一日〜十一月一七日 ..... 菊供養

毎月一七日 ..... 観音の命日

年間を通じて参詣者は大祭の時に多い傾向にあるが、惠隆寺・立木観音同様菊供養の時も、安楽往生を念願においた参詣者が少なくない。妙法寺・鳥追観音には、大部以前に赴いた経験はあるものの、その時は関心の向きが異なり、筆者自身は調査を実施していない。そこで以下、伊藤由佳子の成果によりながら報告することにした<sup>(21)</sup>。

大正年間には、寺の前を走る道路（旧越後街道、現国道四九号線）は、荷馬車や荷車が往来するだけの細いものだった。参詣者は地元の人々が多く、現在も観音講が残っていることから、妙法寺は地域社会と関わりが深い寺であった。その後（昭和四〇年頃か？）路面が舗装されたが、この頃は自動車が二台擦れ違えないほど狭い道路であった。そのため参詣者は現在ほど多くはなかった。それでも新潟、山形などから参詣者があり、バスによる団体参詣が少しずつ見られるようになった。昭和四七年に二車線化されると、三重や富山方面からも来るなど個人参詣、団体参詣の両者とも地域が拡大した。同寺の団体参詣者の人数も増加の一途を辿った。先

にも述べたように、新潟県内のバス会社が三観音を巡るツアーを企画したためである。多い時には一日五〇台のバスが寺にやって来たという。個人参詣者は自家用車を利用してくる場合が大半で、近年では口コミの果たす役割も大きく、「近隣の知人・友人に聞いてやった来た」という参詣者もかなりいるそうである。

往生祈願の方法は、本尊に祈った金剛寿命尊の腹帯を撫で、「抱きつき柱」に抱きついてから、先述のように西の出口より堂の外へ出るというものである。この「抱きつき柱」には、他の二観音と異なつて善男柱、善女柱があるのが特徴である。妙法寺・鳥追観音では、極楽往生のための祈禱を行なっているが「二世安楽」の祈禱と依頼者には説明している。また肌着・下着への祈禱については、参詣者が持参し特に希望があつた場合は、未使用のものに限つた判を押している。参詣者の割合は、六〇才代から七〇才代のどちらかといえば女性が多く、定年退職した男性や、そのような夫を持った女性が連れ添つて訪れる傾向も見られる。中にはリピーターもあり、その場合には二タイプがある。一つは団体参詣への参加をきっかけにこの寺の存在を知り、その後個人的に続けて参詣している場合である。二つ目は、家族の中で継続して信仰が伝えられている場合である。妙法寺・鳥追観音のご利益の多様さについては先に触れたが、縁結び、安産、子育て祈願などを目的に訪れた参詣者が、子供が大きくなつて手が離れた際に、今度は自分の安楽往生を祈願しにやってくる。さらには子育て祈願をしてもらった子供が、ま



た安産祈願や安楽往生祈願にやつてくる等々である。

(3) 中田観音（新鶴村中田・弘安寺）

『角川地名大辞典7・福島』には次のように記されている。鎌倉時代の当村域には、富塚盛勝と称する豪族がいたと伝えられ、佐布川（会津高田町）の江川長者の娘常姫との恋物語がある。根岸（大字米田）には富塚の屋敷跡と称する所があり、この地の弘安寺は弘安年間（一二七八～八八）に創建されたと伝えられている。本尊銅造十一面観音には、文永十一年（一二七四）の刻銘があり、弁天堂とともに、国の重要文化財に指定されている。<sup>(22)</sup>

弘安寺・中田観音の縁起は以下の如くである。会津高田町佐布川村に江川常俊という長者がいた。しかし江川長者には子供がなく、法用寺に祈願して子供を授けていただいた。そうして成長した娘・常姫一七才の春、御礼のため法用寺境内の「虎の屋の桜」の満開の時に参詣し、地頭・富塚盛勝と出合った。その時盛勝公二〇才、江川常姫一七才。この時姫は貧しい参詣者達の姿を見て心を痛め、彼らを救うには江川家の財産と盛勝公の財産を合わせ多少なりとも施ればと思い立ち、盛勝公に三回申し込んだが全て断られてしまった。やがて姫は病にかかり亡くなった。長者の常俊は姫の死を悲しみ、文永十一年（一二七四）菩提のために観世音の像を铸造させた。弘安二年（一二七九）盛勝公は伽藍を造営し、弘安寺と名づけた。

中田観音のご利益は(1)縁結び、(2)安産、(3)悪事災厄を除き、二世安樂にして病魔平癒し其寿命長寿にあるという。そうして「死病の床についたときは、三日、五日、十日にして成仏するように柱に抱きつきます。この中田観音を日限り抱きつき観音、又はころり観音と言いつく<sup>(23)</sup>」とのことである。中田観音の年中行事は次の通りである。

正月三日……………初縁日

六月一〜三〇日……………恒例大祭

八月九〜一〇日……………四万八千日

十一月一〜十日……………菊祭祭典

毎月一七日……………御観音命日

日程は多少異なるものの、三観音における年中行事は、初詣り、例大祭、四万八千日、菊供養・菊祭とほぼ共通している。なお、中田観音の菊祭についていえば、かつては年寄り達が太根・ゴボウ・カボチャ等の收穫物を一対思い思いに持参し、一本は奉納して残りの一本を持ち帰って食べると、願いがかなうというものであった。ところが年寄り達が「そんな重いものを」と言うようになり、菊の花一対に切り替えて今日に至っている。少なくとも先々代の時は菊に

なっていたそうで、大正期以前の変化と思われる。多分行事の名称もそれに合わせて変えたものと推測される。「他の観音さんは、内の菊祭にならって行事に取り込んだ」と、住職は中田観音のオリジナリティをしきりに強調していた。

ここにも古くから新潟方面の参詣者が多く、今でも七〇パーセントぐらいを占めているという。昭和四〇年代後半に、新潟と福島県の浜通り（磐城）とを結ぶ国道四九号線が舗装されると、中田・立木・鳥追の三観音が宗派を越えて連携し、「コロリ三観音」として積極的に宣伝した。ことのきっかけは、かつて鳥追観音の住職が冬場一〇年ほど中田観音に通ってお勤めをしていたことがあり、「三観音として打ち出さないと、内には参詣者も来ない」と言い出した。門前の観音茶屋のご主人の勧めもあって、中田観音の住職は連携することに同意したという。今ではその鳥追観音への参詣者が最も多いほどであり、一頃は年間三〇万人に達することもあった。パブルがはじめて参詣者は大分減ったが、中田観音の場合今日でも年間一二万人ほど訪れる。新潟や県内のみならず、東北や関東の都県からの参詣者もいる。

観音堂内の、ご本尊に向かって右側にある「抱きつき柱」は、別名「縁結び柱」と称する。かつては八月九、一〇日の四万六千日の日に限り、柱に布の切れ端を結びつけて抱きつき、諸願を託した（写真5参照）。今では日も限らず、しかもただ抱きついて祈願するだけになっている。

中田観音では祈禱札、お守りの類の他数多くの安楽往生グッズを販売している。十一面観音



写真 4 中田観音堂（新鶴村・弘安寺）

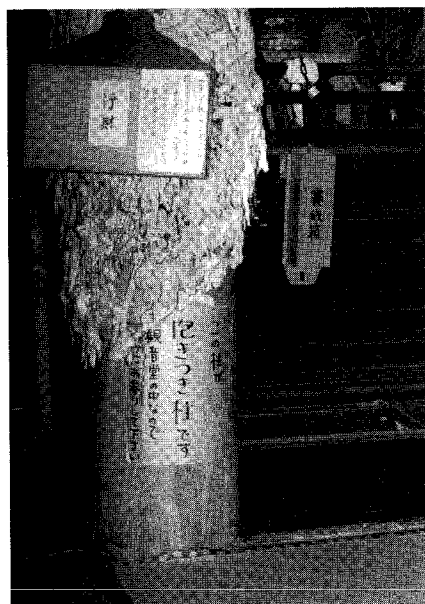


写真 5 中田観音堂内の  
「抱きつき柱」  
(新鶴村・弘安寺)

祈禱札、中田観音枕カバー、安眠健康枕守り（備長炭入り）、不動守り、身代わり災難除け守り、一年のお達者絵馬、三観音掛軸、夢叶うお守り、健康お守り、健康成す（茄子）お守り、黄金カエル守り、菊鈴、地藏守り、七福神、中田観音守り、玉守り、肌身守り、錫杖交通安全守り、交通安全守り、金運守り、方位厄除守り、ランドセル型キーホルダー守り、本水晶猫目石（不思議なパワーであなたを守ると説明書にある＝筆者注）等々である。ただし、枕カバーを売るようになったのは二、三年前のことである。他のコロリ観音を回って来た参詣者には、「〇〇観音さんには置いてあるのに、どうしてここには無いの」と言う人も多く、多少取り残されたような気もしてやむをえず置くようにしたという。中田観音では、お守りを作成する際一つ一つ観音のご身軀に触れ、ご祈禱をした上で販売している。購入者は具合の悪い所をこのお守りで三回さすって、それを枕の下に置いて休めば治る、とずっと参詣者に伝えてきた。「だから枕カバーなど……」という気持ちもあつたようである。

参詣者の中には、下着を持参して「朱印を押してくれ」と頼む人も多い。住職が「それをどうするのですか」と伺うと、「肌身につける」というので、「仏をないがしろにする行為」と思つて丁重にお断りすると、「他の観音さんは押してくれるのに」と文句を言われるそうである。しかし中田観音側も、そうした参詣者の要望を全く無視しているという訳ではない。一二年毎の巳年に限って受けているのである。「何故巳年なのか」との筆者の問には、「縁起に

記載されている」との返事であったが、その縁起は拝見させていただけなかった。中田観音で出している小さなパンフレットに、「会津中田観音の巳年の御利益 平成一三年は巳年です。この十二年に一度の巳年に肌着（シャツ、パンツ、お腰、枕カバー等新しいもの）を、御祈祷して身につけると腰から下の病氣にかからない。又、身を守るということです」とある。このように新しい肌着に限り、しかも家族の分を合わせて沢山持ち込む人もいることから数を制限して受けているとのこと。持ち込まれ三、四人分の物を一組として祈祷をし（約一時間半かかる）、団体分についてはその場では祈祷をせず、後で実施して返送する形をとっている。

### 結びにかえて

以上、山形市内の三カ所と会津地方の三観音のコロリ信仰について報告した。会津コロリ三観音は、交通事情の好転に乗じて連携し、大々的に宣伝を繰り広げた。行政や観光業者も全面的にバックアップし、マスコミ報道も結果的にそれを支援する形となり、コロリ信仰の拠点として、不動の地位を築くに至った。元々は経営戦略による三観音の提携であったが、会津コロリ三観音巡りの宗教的意義づけは次のようになされている。<sup>(24)</sup>

人はすべて三毒（貪欲、瞋、痴）によりて、もろもろの苦悩を受ける。三観音（鳥追観音、立木観音、中田観音）を巡拝し、罪障消滅を念ずれば、苦しみを除き、現世に無比の幸福を得さしめ、寿命安楽、福寿円満にして悲願の大往生を遂げさせ給うと云う。

三観音のご利益は先に紹介したように縁結び、安産、子育て等多様であるが、観音が持つ功德「二世安楽」を巧みに活用し、また高齢化社会に対応する形で「コロリ祈願」、「安楽往生祈願」に特化させたのである。三観音は提携していることが理由なのか、元々本尊を同じくすることに要因があるのか判然としないが、「抱きつき柱」を介して安楽往生を願うという形も、年中行事も類似している。その一方でオリジナリティを強調したり、独自性を出そうと切磋琢磨している。また、参詣者が持参する肌着への対応姿勢も、住職の考え方によって若干差が見い出せた。

一方山形市の風立寺も、寺院の立て直しから、コロリ信仰を前面に打ち出して多くの参詣者を集めるようになった所である。観光の名所山寺（山形市山寺・立石寺）を近くに控えていることも幸いした。本尊は阿弥陀であるが、元々極楽往生を約束してくれる仏であり、「後世安楽」と結びついて人々に受け入れられていったのだろう。長谷堂のそれや平泉寺といった山形市内の他の二カ所は観音を祀るもので、こちらは地道な宗教活動に徹しているが、口コミを通じて

信仰が広がったものである。山形市内の場合も、これら三カ所を巡拝する人がいるそうである。

一方参詣者について見ると、大半は女性である。会津コロリ三観音や山形市の風立寺等は団体客が多く、物見遊山の人が目立つものの、深刻な事情を抱えた人も少なくない。年老いた老人もいれば、寝たきり老人の介護に当たっている人、あるいはその家族もいる。また過去に介護経験を持つ人もおり、自分の行く末を念じつつ、「身内を同じ目に会わせては……」という思いも他方ではあるように見受けられる。男性は一般的に看取ってもらう立場であり、比較的气が楽であるが、寝たきり老人の介護で苦勞している連れ合いの姿に、いたたまれず参詣した、というケースもまま見られる。介護される者とする者の存在、そして両者の切実な思い、これがボックリ（コロリ）信仰隆盛の要因に他ならない。なお、団体で出向いた後、改めて個人で参詣するという形も目立つし、子供の頃おばあちゃんにつれられてやって来て、彼女が安らかに往生をとげたので自分も年頃になってやってくるようになった。あるいは母親に次いで自分も信者になった、といった連鎖も、信仰を継続せしめる一つの原動力といえる。



注

- (1) 木村博『死と仏教と民俗』名著出版 一九八九年 四七頁。
- (2) 木村博前掲書 四二～四九頁。
- (3) 松崎憲三「ポックリ（コロリ）信仰の諸相（一）と中部地方を事例として」『日本常民文化紀要』二三輯 成城大学大学院文学研究科 二〇〇三年 八一～一一七頁。
- (4) 例えば一九八六年九月一〇日付朝日新聞夕刊「お年寄りは……柱にポックリ祈願参拝ふえる『抱きつき観音』」など。
- (5) 立川昭二『病気を癒す小さな神々』平凡社 一九九三年 四〇～四五頁。木村博前掲書 五七～五八頁。
- (6) 松崎憲三「地蔵とポックリ（コロリ）信仰」『成城大学民俗学研究所紀要』第二七集 二〇〇三年 一五三～一五四頁。ちなみに秋田県湯沢市浦町・長谷寺（曹洞宗）のコロリ地蔵についても同稿で取り上げている。
- (7) 木村博前掲書 四九～五二頁。武田正「ころり薬師」『おんなのフォークロア』岩田書院 一九九九年 一二四～一二七頁。
- (8) 武田正前掲論文 一二五～一二六頁。
- (9) 木村博前掲書 四六～四九頁。
- (10) 竹内理三他編『角川地名大辞典6・山形』角川書店 一九八一年 六二九及び八六四頁。
- (11) 木村博「現代人と『ポックリ』信仰」『仏教民俗学大系7・仏教民俗学の諸問題』名著出版 一九九三年 一九六頁。
- (12) 竹内理三他編前掲書 六六六頁。

(13) 伊藤由佳子「ボックリ信仰の諸相」一九九六年度成城大学大学院文学研究科に提出した修士論文、未発表。

(14) 竹内理三他編前掲書 三八九及び八六〇頁。

(15) 伊藤由佳子前掲論文。

(16) 歴史春秋社編刊『会津コロリ三観音』一九九三年 一〇三三頁。

(17) 竹内理三他編『角川地名大辞典7・福島県』角川書店 一九九一年 五六一及び一〇七八、一〇七九頁。

(18) 立川昭二前掲書 四三頁。

(19) 竹内理三他編前掲(16)、一、二五〇〜一、二五一頁。

(20) 歴史春秋社編前掲書 二一〜二三頁。

(21) 伊藤由佳子前掲論文。

(22) 歴史春秋社編前掲書 五〜七頁。

(23) 歴史春秋社編前掲書 五〜七頁。

(24) 歴史春秋社編前掲書 四頁。